

公的図書館における新風土記叢書の所蔵状況：新風土記叢書の普及について考えるために

立岡 裕 士

(キーワード：新風土記叢書 小山書店 郷土文学 図書館)

I はじめに

1936年から1948年にかけて小山書店から新風土記叢書8冊が刊行された。本叢書創刊の経緯については、出版者である小山久二郎自身の回想(小山, 1982)から知ることができる。すなわち概略は次の通りである：

- ・創業¹⁾まもない小山は高価な図書を刊行する一方で、経営上の観点から「良いものであって、売れそうなもの」(小山, 1982, p. 48)の企画を求めている。
- ・1935年の秋に、小山と旧知の河盛好蔵は「現代の風土記」を作ることを提案した。「現代の選りすぐった文人に自分の故郷を語らせ、またその土地出身の画家に挿絵を描いてもらう」という案で、提案された小山は「息を呑むような気持ちで昂奮し、二人でたちどころに原案が出来上がるほどに発展した」(小山, 1982, pp. 48～49)。
- ・河盛との原案で挙げられていた佐藤春夫・宇野浩二はこの企画に直ちに賛同した²⁾。またこの企画を知った安倍能成は四国遍路を、新村出は東海道を、それぞれ執筆することを提案した。

この叢書は1936年に最初の2冊を同時に刊行した後、一時頓挫する。その次第は小山(1982)に記されているが、戦中に再開された理由などは記されていない。また戦後再開されなかった理由も明らかではない。しかし、創刊時にもまた叢書全体についても「売れそうなもの」という小山の狙いはある程度成功したようで、叢書第1冊の『大阪』の方はたいへん評判が良く、たちまち再版を出すようになった(小山, 1982, p. 55)といい、また第5冊目の『日向』も「当時、多少の好評を得、初版五千部はすぐに売り切れた」(中村, 1957, p. 225)という³⁾。本叢書については、それに含まれる『津軽』その他の作品に関する研究のなかで言及されることは多い(たとえば矢富(1970)・藤原(1995)・高澤(1999)・山口(2002, 2009)・吉岡(2009))。しかし本叢書を全体として取り上げたものは紅野(1979, 1983)・松本(2006)しかなく、実態の確認は書誌的な事実についてもまだ十分ではない。戦時下にあって発売直後の書評もほとんどない⁴⁾ため、「このシリーズは好評を博した」(矢富, 1970, p. 180)ことを裏づける具体的事実、先に引いた当事者の証言以外に見あたらない。それ以上に、単によく売れたという事実だけでは、この叢書がどのように流布し読まれたのかを知ることはできない。日本各地で同じように読まれたのか、それとも読者は空間的に偏在していたのか(さらにこの叢書のようなものは、流布が特定の場所に偏るにしても、叢書全体が一体として偏在するのではなく、各冊がそれぞれ別の場所に偏在したのではないか)。本稿ではかかる事実的な問題を考える。もとよりこれを直接明らかにすることはできないので、大学の附属図書館および都道府県ないし市町村立の図書館における現在の所蔵状況を調べることにより近似値としたい。

II 新風土記叢書の概要

(1) 刊行時期・状況

叢書として刊行された8冊は表1の通りである。先述のように、刊行された時期は大きくは戦前と戦中とに分けることができる。従来看過されてきたが、実際の刊行状況は奥付の刊記と一致しないものが多い⁵⁾。新聞広告⁶⁾および日本読書新聞の図書刊行情報⁷⁾を参考にすれば以下ようになる：

- ・『大阪』『熊野路』：朝日⁸⁾(1936.03.31)掲載の広告には刊記よりも早い、4月2日発売とされている。
- ・『佐渡』：読書⁹⁾230号(1942.12.12)や朝日(1942.12.15)に広告があるものの、読書233号(1943.01.23)の「新刊週報(1月11日～1月14日分)」欄に記載されているので実際の発売は1943年初めと思われる。

表1 新風土記叢書各作品の書誌

	書名	著者	刊記	ページ数	字詰め (字×行)	枚数	発行部数	頒価(円)
1	大阪	宇野浩二	1936.04.04	166	32×11	146	記載なし	1.00
2	熊野路	佐藤春夫	1936.04.04	144	32×11	127	記載なし	1.00
3	佐渡	青野季吉	1942.11.20	266	35×11	257	5000	1.80
4	出雲・石見	田畑修一郎	1943.08.20	268	34×11	250	5000	1.88 ^{*1}
5	日向	中村地平	1944.06.15	260	40×12	312	5000	1.92 ^{*2}
6	明石	稲垣足穂	1948.04.20	231	37×12	256	(2500)	(2.50)
7	津軽	太宰治	1944.11.15	273	40×12	328	3000	3.16 ^{*3}
8	秋田	伊藤永之介	1944.11.15	269	40×12	323	3000	3.16 ^{*3}

「枚数」はページ数と字詰めとから計算した文字数を400字詰換算で求めた概数。

『明石』の発行部数と頒価とは日本読書新聞310号(1944.09.21)の「近刊予報」欄による。1948年の発行時には発行部数の記載なく、定価は100円であった。

*1「特別行為税相当額」8銭を含む。*2「特別行為税相当額」12銭を含む。*3「特別行為税相当額」16銭を含む。

・『出雲・石見』：読書259号(1943.07.24)「近刊予報(自8月1日至8月31日出来予定)」に掲載され、朝日(1943.08.17)の小山書店広告に「下旬発売」として示されている。これ以後の朝日掲載の小山書店の広告に『出雲・石見』は見えない。刊記通りに発売されたのかもしれないが、納本情報は確認できなかった。なお、のちに引用に見られるように、朝日掲載の広告は7月23日に田畑が急逝した事態(紅野, 1980)を反映した内容となっている。広告掲載まで20日以上余裕があったからだとすると、この(時期の)広告は現実に追従できたと言えよう。

・『日向』：まず読書288号(1944.02.26)の「近刊予報(自4月1日至4月10日出来予定)」に掲載されている。ついで朝日(1944.04.04)の小山書店広告に「5月中旬出来予定」として示されたが、同紙(1944.06.09)掲載の広告では「6月下旬発売予定」となった。これ以後の朝日掲載の小山書店の広告に『日向』は見えない。『出雲・石見』同様、刊記通りに発売されたのかもしれないが納本情報は確認できない。

・『明石』：読書311号(1944.09.21)の「近刊予報(10月中旬出来予定)」に掲載された後、読書312号(1944.10.11)・315号(1944.11.11)の小山書店広告に記載されている。本書は、配本直前に焼失し1948年に重版されるまで発売されなかった(稲垣, 1948, p.1)。読書315号の広告が焼失という現状に追従できたのであれば焼失した図書(の)の広告をそのままにはしないであろうから、その限りで、『明石』は11月初めまでは配本段階に達していなかったということになる。

・『津軽』：読書315号(1944.11.11)の「近刊予報(11月下旬出来予定)」欄に掲載されているが「納本旬報」欄に掲載されるのは読書322号(1945.02.01)である。

・『秋田』：『津軽』と同じ号の「近刊予報」に掲載され、読書324号(1945.02.21)の「納本旬報」欄に掲載されている。

各作品の一次的な流布の程度に直接関わる発行部数は、『大阪』『熊野路』については不明である。『佐渡』などが5000部であることからすれば、その程度は印刷したであろう(I章で引用したように『大阪』は増刷されてもいる)。戦局の悪化にともない発行部数が削減されたのは当然であろうが、『津軽』『秋田』と同時期か少し前に発行されたはずの『明石』がそれらよりも少ない2500部であった理由は不明である。

頒価も流通に関係するであろう。『大阪』『熊野路』は、その翌年の『中央公論』と同額の1円である(週刊朝日, 1981, p.15)。『佐渡』以降は物資の欠乏に応じて価格が高騰したのでであろう¹⁰⁾。特に上述のように刊行が遅れていたと見られる『明石』は、広告ごとに値段が変わっている(読書312号(1944.10.11)掲載の広告では2.70円。同紙315号(1944.11.11)の広告では2.96円)。この時期に印刷状況が急速に悪化していることがうかがえる。発行部数の減少とあいまって、本叢書が広く流布することに障害となったであろう。

(2) 対象地・執筆者

本叢書各冊の第4表紙には既刊・続刊の書名・執筆者名が記されている。先行研究でも取り上げられているが行論の都合により表2に示した。

表1・2から明らかのように、本叢書の対象となった場所は規模の点で2～3種類に分けられる。すなわち、大阪・明石・仙台・金沢(・東京・京都・奈良?)などの都市レベル、出雲・石見や日向などの県域レベル、そして熊野路・津軽などの中間レベルである¹¹⁾。このように規模の違う空間が混在していることは、戦争の激

表2 各巻第4表紙に掲載された叢書の書名・著者名

	大阪 熊野路	佐渡	出雲・石見	日向	津軽 秋田	明石
1	大阪 宇野浩二	大阪 宇野浩二	大阪 宇野浩二	大阪 宇野浩二	大阪 宇野浩二	大阪 宇野浩二
2	熊野路 佐藤春夫	熊野路 佐藤春夫	熊野路 佐藤春夫	熊野路 佐藤春夫	熊野路 佐藤春夫	熊野路 佐藤春夫
3	台湾 森丙午稿 佐藤春夫編	佐渡 青野季吉	佐渡 青野季吉	佐渡 青野季吉	佐渡 青野季吉	佐渡 青野季吉
4	東京 鏑木清方	出雲・石見 田畑修一郎	出雲・石見 田畑修一郎	出雲・石見 田畑修一郎	出雲・石見 田畑修一郎	出雲・石見 田畑修一郎
5	京都 富田溪仙	会津 真船豊	会津 真船豊	日向 中村地平	日向 中村地平	日向 中村地平
6	仙台 小宮豊隆	東京 鏑木清方	東京 鏑木清方	越前 中野重治	明石 稲垣足穂	明石 稲垣足穂
7			日向 中村地平	足柄 尾崎一雄	津軽 太宰治	津軽 太宰治
8			金沢 徳田秋声	出羽 伊藤永之介	秋田 伊藤永之介	秋田 伊藤永之介
9			薩摩 里見弴	会津 真船豊	土佐 田中英光	
10				東京 鏑木清方	白河 中山義秀	

- ・『大阪』『熊野路』および『津軽』『秋田』の第4表紙の記載内容はそれぞれ同じなので一括して表示した。
- ・各欄とも、1行目に書名、2～3行目に著者名の順に示した。
- ・明朝は「既刊」、ゴチックは「続刊」を示す
- ・『大阪』『熊野路』掲載の一覧では、『京都』『仙台』には番号が振られていない。

化（または敗戦）によって途絶を余儀なくされたか否かに関わりなく、本叢書が日本全体を系統的に被覆する類の企画ではなかったことを思わせる。紅野（1979）は刊行予定の書名・順序がしばしば変更されていることから企画には一貫性が欠けていたとする。それはこのような網羅性・系統性の欠如の帰結であろう¹²⁾。

河盛と小山とが最初に構想を談じた時はともかく、その後は執筆者は直接・間接の知人の中から選定され、まず執筆者が決まってから対象空間が設定されたのではなかろうか¹³⁾。執筆者が伝手で選ばれて（も）いる様子は、太宰の書簡からうかがえる¹⁴⁾。中村（1944, p. 260）も『日向』の執筆は田畑の勧めによるとしている。小山と執筆者（予定）者との関係は、佐藤・谷崎・宇野・鏑木・富田・西川・小宮豊隆・志賀直哉・真船豊・里見・中野・中山については小山（1982, pp. 17, 20, 23, 49, 50, 55, 59, 85, 93, 94, 127, 146）に記されている。森丙午は先駆的な台湾研究者であり、佐藤春夫の台湾旅行（1920年）の際に世話をした。1926年に失踪したため遺族が佐藤に森の遺稿集発行を依頼しており、『台湾』はそれとして計画されたとみられる（笠原, 2005）。田畑・中村・太宰・田中・伊藤は小山書店の『日本小説代表作全集』に作品が収められている¹⁵⁾。また徳田は小山書店の『新風土』創刊号（1938年）に寄稿している。執筆者同士で師弟・友人の関係にある者も少なくない。すなわち田畑・中山は宇野に師事しており（紅野（1980, p. 513）・中山義秀全集編集部（1972, p. 484））、また尾崎・田畑・中村・太宰は友人である¹⁶⁾。青野・伊藤も友人である（伊藤, 1956）。田中は太宰の弟子である（林, 1965, p. 451）。

なお、執筆者の選定が無計画的であったとしても、依頼・応諾から出版までの期間が著しく短いとは限らない（これはまた、原稿の量や内容ないしは執筆の方法（現地調査の有無）によって大きく変わりうるであろう）。小山の回想通りであれば企画から半年で出版に至ったことになる『大阪』『熊野路』は、量も少なく内容としても現地に赴く体のものでないうえ企画以前の準備があった（後述）。青野が執筆を引き受けた時期は不明である。したがって準備期間は分からないが、1942年5月に1週間ほど佐渡に行き（青野, 1990, p. 163）、8月8日には脱稿しているようである（青野, 1942, p. 266）。調査から完成までが短いのは一部に旧稿を利用してい

る（青野，1942，p. 266）ためかもしれない。田畑が応諾した時期も不明であるが1942年の10月～11月9日に島根を訪れた（田畑，1980a，p. 483）後，3月7日に起稿し4月19日に脱稿した（田畑，1980a，pp. 460・463）。これに対して伊藤（1944，p. 261）は『秋田』執筆を「数年越しの小山二郎氏との約束」とする（「あとがき」の文章であるから，文字通りに受け取りうるかは疑問の余地があるにせよ）。『津軽』の場合，1944年5月12日～6月5日に現地を訪れ，6月15日に起稿し7月末に脱稿した（山内，1992，pp. 557～558）。相馬（1995，p. 263）は『日向』の第4表紙に記載されていないことを根拠に，1944年の春に急遽企画されたとする（津島（1970，p. 250）も1944年の5月頃に執筆と津軽行きとが決定したという）。しかし木山（1969，p. 691）によれば¹⁷⁾，1943年の冬までにはすでに最低限の交渉はなされていたことになる。田畑は1943年1月28日に催促を受けている（田畑，1980a，p. 457）ので現地調査後は執筆を急がされたとしても，『津軽』も含め交渉の開始から見れば1年程度は見込んだ企画だったのではなかろうか。

執筆（予定）者の選定がどのように行われたにせよ，そこに地理学者は含まれていない。「岩波講座地理学」は，小山の独立の前後の時期（1931年から1934年）に刊行された。小山はこの講座を担当していなかったようであるが，望めば地理学者を紹介されることは可能であったろう。また小山は寺田寅彦に親炙していたので，そちらに伝手を求めることもできたはずである。講壇地理学を意識的に排除したというよりも，それと全く無関係な形で構想されたのが本叢書だということであろう。

(3) 分量・内容

分量から見ると，400字詰換算150枚足らずの『大阪』『熊野路』，250枚程度の『佐渡』『出雲・石見』『明石』，300枚を超える『津軽』『秋田』の三つに分けられよう（ただし，1ページ当たりの字詰めのと紙質との違いのために，書物としての厚さには原稿量ほどの違いはない）。内容（題材）にも大きな違いがある。『大阪』は特に谷崎潤一郎の大阪人評を念頭に，それに反論する形で大阪人の性格を描こうとしたものである。『熊野路』は佐藤の曾祖父の作品の註解という装いで，林業・漁業の変化を叙しながら，近代の（観光）開発を批判する。それらに対して『佐渡』『出雲・石見』『日向』『津軽』はそれぞれの作者の現地探訪を踏まえた作品である。『佐渡』は半ば近くを佐渡に流された順徳上皇・世阿弥を追想することに宛てられている。『出雲・石見』は伝統産業を主に取り上げる。『日向』は宮崎県の招きに応じて書き散らした各観光地についての文章を再録したものである。『津軽』は子守りであったタケ女と再会しにいく旅行を記した紀行文（を装った小説）である。『秋田』は秋田に疎開帰住した作者の周辺に関して歳時記風に記す。『明石』も現地在住者による作品であり，『大阪』と同様に街中の事物に触れて（『大阪』とは違い名所なども取り上げているが）明石人の特性を描こうとしている。

(4) 叢書の意図

本叢書創刊の主眼が「売れそうなもの」にあったとしても，それが具体的に「風土記」という形を取るためには，そうしたテーマを需要する時代思潮があると小山や河盛が判断したということであろう。小山（1982）には先に引用した以上には本叢書の意図は述べられていない。また『大阪』『熊野路』にも刊行の辞のようなものは付けられていない。しかし両者の発売直前の朝日（1936. 03. 31）に掲載された広告には400字余の文章が添えられている。これを創刊の辞と見ることができよう。全文は以下の通りである：

A 日本国土の有する美しいもの善いもの香あるものを，本当に美しいと善いと芳しいと感じ得ることは，現代流行の所謂日本精神の空疎を救つてそれを生きた具体的なものにする唯一の直路である。然も日本を知るには地方を知らねばならぬ。特殊を浸透した上の全体こそ始めて真の全体である。本叢書はこの根本的意図の下に新たな郷土的文学を生まんとする野心を以て企てられた。即ちその地出身若しくは親知の文学者芸術家に依頼して，全日本の特色ある都市，郷里，地方の人情生活風土山水をまざまざと読者の前に活現せしめ，読者をして自らその地に望みて，その人と握手し，その土を踏み，その水を飲むが如き境に遊ばしめるものは，独り本書の有する魔術であり，この名文の花に添ふるにその地出身及び在住の名画家名写真家の挿絵の錦を以てすることは，又読者への無上の贈物でなければならぬ。我々はこの叢書が次第に「地」を見出し「人」を得て，昭和の風土記として長く日本人の間に伝へられる日を思ひ，心臓の高鳴り頻なるを覚えるのである。

一方『出雲・石見』『日向』では，巻末に「小山書店継続発行物」と題して本叢書および『日本小説代表作全集』・『八雲』が説明文つきで表示されている¹⁸⁾：

B この叢書は，文壇を始め各界のすぐれた方々に，おのが故郷を風韻豊かな風土記に再現して戴き，時代の痼疾に触まれて故郷を失うた近代人の胸にふたたび故郷への愛着をよびさまし，なほ進んでは，神のみ手に生みなされた，うまし国たる日本を，あらためて見いださんがためにつくられた。

『佐渡』以降の各冊については、広告欄が狭小になったためであろう、叢書全体に対する言及はなく、それぞれの作品についての短い紹介が掲示されている：

・『佐渡』

C11 読書230号（1942. 12. 12）広告：日本海の孤島佐渡を故郷とする著者が、その愛情を傾けて歴史、自然をのこりなく書きつくした新風土記

C12 朝日（1942. 12. 15）広告：日本海の荒波に四囲を洗はれ美しい自然と古い歴史を秘めた佐渡。その孤島を故郷とする著者が再び思出の地に杖を引いて止み難い懐郷の念にかられて書き綴つた新しき風土記。

・『出雲・石見』

C21 読書259号（1943. 07. 24）「新刊予報」：著者の郷土たる出雲石見の風土と歴史と夢とを綴る

C22 朝日（1943. 08. 17）広告：幽遠の神代につながる聖地出雲石見の今をしらべ、昔をしのぶ風韻豊かなこの風土記は、過日卒然と逝かれたる著者の貴重な絶筆なるがゆゑに、深い哀悼を以て世に贈る。

・『日向』

C31 読書288号（1944. 02. 26）「近刊予報」：霊地日向の歴史地誌人情を文学的に表現せるもの

C32 朝日（1944. 04. 04）広告：著者の郷里にして天孫降臨の霊地たる日向の地の人情自然歴史地誌文化等を独自の文学的視点より描出せるもので新風土記叢書第五編として世におくる

・『明石』

C4 読書311号（1944. 09. 21）「近刊予報」：我国の古文化と関係の深い明石を現代作家眼の映想を記述せるもの

・『津軽』

C5 読書315号（1944. 11. 11）「近刊予報」：未曾有の戦時下に奮迅しつゝある生ける津軽の書下し新風土記

・『秋田』

C6 読書315号（1944. 11. 11）「近刊予報」：郷土に疎開帰住した著者の郷土風土記

A・Bに共通するのは、故郷喪失を現代精神の空虚さとして捉え、それを救済するために郷土文学を志向する、という立場であろう¹⁹⁾。Bの後半に現れる「神のみ手に生みなされた、うまし国たる日本」のような表現が、時局に追従した変節であるのか、面従腹背的な修辞にすぎないか、あるいは当初から志向していた「郷土的文学」の半ば必然的な帰結にすぎないのか、という問題を解くことは本稿ではできない。本叢書の背景として、高澤（1999）は和辻の『風土』刊行（1935年）を契機とする「風土ブーム」を指摘する。『風土』の影響は少なくないかもしれないが、風土記の流行はすでにそれ以前から始まっており²⁰⁾、むしろ和辻がそれに便乗したと言えよう。少なくとも、1930年代の郷土研究の流行そして「故郷」を創出する明治後半からの運動が風土記に結実する状況（成田（1998）の特に第3章）と関連づけて検討する必要があるだろう（たとえば本叢書中、県域を対象とするものが秋田以外は書名に国名を用いていることにも、この叢書の性格が表れているのではないか）。なお、前節で見たように本叢書の各冊はその内容にかなりの違いがある。したがって、この企画を引き受けた作家が、応諾に際して抱いていた意図も同じではないかもしれない²¹⁾。しかしかなる意図にせよ一群の作家たちがこのテーマに関心をもっていったという自体、「売れるもの」としてのこの企画を成り立たせる時代思潮の一部をなしていると言えよう。

表3 「風土記」を冠する図書の刊行状況

年代	冊数
1868～1900	9
1901～1925	8
1926～1930	11
1931～1935	24
1936～1940	31
1941～1945	55

(5) 戦後の新風土記叢書

戦後、小山書店は戦中には事実上刊行できなかった『明石』と太宰の死後に再刊した²²⁾『津軽』とを刊行したが、それ以外には、本叢書の新刊も出さなかっただけでなく既刊分の増刷もしなかった。他の出版社からも全体としての叢書が再刊されることはなかった。本叢書各作品の単行書としての刊行状況を、国会図書館および作品

の舞台となった各県立図書館の蔵書検索によって調べた(表4)。『大阪』『熊野路』以外は単行書として刊行されているが、『日向』『津軽』以外はそれぞれの作品の地元組織による発行であることが分かる。すなわち、少なくとも戦後は、これらの作品は基本的に、局地的な古典として提供され享受されてきたと言えよう(ただし『佐渡』『日向』『秋田』を除く5作品は各著者の個人全集にも収録されており、ある程度広い読者に享受されてきたのは『津軽』に限らない)。

表4 各作品の単行書としての刊行状況

書名	刊行状況
大阪	なし
熊野路	なし
佐渡	佐渡郷土文化の会(1980)
出雲・石見	石見詩人社(1961) 石見詩人社(1970) 田畑文学を守る会(1991) ハーベスト出版(2004)
日向	角川書店(1957) 鋳脈社(1996)
明石	木村書店(1963)
津軽	新潮社(1951) 角川書店(1957) 講談社(1973) 集英社(1974) 津軽書房(1976) 旺文社(1978) 日本図書センター(2002) 岩波書店(2004) フロンティアニセン(2003) 未知谷(2006) JTBパブリッシング(2010)
秋田	無明舎出版(1985)

刊行状況欄は「出版者(刊年)」の形式で記載している。

(6) 未刊分の消息

「続刊」として掲出されながら刊行されなかったものについて考えることは本稿の作業からはずれるため別稿に譲る。しかしそのうち4者については既存の文献に記されているがこれまで一括して紹介されていないので、以下に略述する。

- ・『越前』：中野は『越前』執筆の交渉を1943年8月に受け、「これを書くため二年ほど一本田ですごすことを考え」た(松下, 1998, p. 52)。
- ・『足柄』：時期が不明ながら「相模風土記を書けと言はれて食指大いに動いたが、結局身体工合に自信がなくて辞退した」(尾崎, 1985, p. 522)。尾崎は1943年春頃から身体の不調を感じ、1944年8月に胃潰瘍による大出血で昏倒した(紅野, 1986)。かくして結果的には「辞退」することになったにせよ、初めから全く応諾していない作者を小山書店が勝手に叢書の一覧に掲載することはあるまい。尾崎の記述は、途中を省いて首尾のみ記したものか、彼の記憶違いによるか、あるいは本叢書との関わりを忌避するための曲筆であろう。
- ・『土佐』：上述のように、1944年8月にはすでに田中は執筆を応諾しているようである。田中の遺作に本叢書の原稿としての「土佐」があるらしいと田宮(1965)は記す。『田中英光全集 8』(芳賀書店)には遺稿「土佐2」が収録されているが、それに該当するか否か(また田宮の記述の当否についても)同全集編集者は記していない。
- ・『白河』：中山は1944年4月に「白河風土記」を書いたが、小山「書店焼失のため出版不可能となった」(中山義秀全集編集部, 1972, p. 488)。小山書店自体の焼失は1945年3月である(小山, 1982, p. 200)。それでは執筆後1年近く放置されていたことになるので、あるいは印刷所の焼失を意味するのかもしれない。

『白河』の場合、1944年4月に執筆したのであれば、執筆の応諾はさらに以前であろう。にもかかわらず『日向』第4表紙の「続刊」に『白河』が掲載されていないということは、その情報が相当古いことを意味する。すなわち、平時であれば比較的短期間に並行的になされるであろう本文と表紙との入稿・印刷および製本という過程が、この時期には乖離した不規則に遅滞した可能性がある。要するに、図書の刊記・刊行時期と表紙の作成時期とは同一視しがたく、したがってそれらから企画の進行具合を推測することも難しいのではなかろうか。

Ⅲ 公的図書館における所蔵状況

図書の普及状態を考えるために公的図書館における当該図書の現在の所蔵状態を調べることには、二つの問題

点が考えうる。第一に、図書の収集がその土地の需要を反映していなかった（したがって架蔵されたもののあまり利用されなかった）可能性がある（もとより当初は求められていなくともそこに存在することにより図書館利用者の読書に一種方向を与える場合もあろう。しかしそれは本稿で考えたい事態ではない）。また叢書ではその一つが購入されることで同じ叢書の他のものも求められる場合もある。しかし新風土記叢書のように急迫した情勢下で刊行された叢書にはそうした可能性も大きくはなからう。第二の問題点は、戦中に多くの都市が焼失された（さらに戦後も火災・盗難その他の災厄がありえた）ことを考えれば、現在の所蔵状態が当初の流布状態を正しく反映していることは保しがたいことである。両問題とも解消するすべはないが、図書の一般人への普及状態を知るために他に適当な手段はないのではなからうか。

(1) 自治体図書館（表5）

それぞれの県立図書館²³⁾の web サイトが備えている県内図書館横断検索機能を利用して、本叢書の所蔵状態を調べた。表5から以下の点が読み取れる。

- ・作品ごとに見ると、最も多くの県で所蔵されているのは『出雲・石見』で、最も少ないのは『秋田』である。『津軽』『明石』とも戦争末期～戦争直後の時期に刊行されたもので所蔵が少ないのは当然かもしれない。しかし最初期の『熊野路』が少なく末期の『日向』が多いこと、戦争中期の『佐渡』と『出雲・石見』とで所蔵県数に大きな違いがあること、を考えると、刊行時期よりも対象地の違いが大きく影響しているように思われる（要するに神道上の要地たる出雲・日向の吸引力である）。
- ・霊地の威光のためか『日向』は北海道・東北でも所蔵する県がある。しかし『出雲・石見』は中国地方での所蔵県が多く、やや局所的である。
- ・その他の作品でも『明石』『大阪』『熊野路』は関西～関東で、『佐渡』『秋田』『津軽』は東日本で、それぞれ所蔵が多い。その意味で所蔵状況には地域的な偏りがあると言えよう。
- ・しかし偏りの単位はかなり広く、たとえば『津軽』『佐渡』の所蔵は東北地方や北陸に集中してはおらず、京都に至る東日本一帯が分布範囲となっている。これは『明石』『大阪』『熊野路』でも同様である。ただし市町村立図書館に関しては、作品対象地の図書館が当該作品を所蔵しており、しかも多くの場合、本叢書中でそれ1作品だけを所蔵している。
- ・県ごとに見れば、叢書全てを所蔵しているのは京都府立図書館だけである。県単位で自治体図書館をまとめれば愛知県も叢書全てを保有することになるが、同県の場合、県立図書館が戦後の設立であり、名古屋市立図書館は戦災で焼失している（同館ホームページによる）ので、京都府とは事態が違う。他には岐阜・大阪・奈良・宮崎の県立図書館が5種を所蔵しており、あるいは叢書として収書を目指していたのかもしれない²⁴⁾。

表5 自治体立図書館における新風土叢書所蔵状況

	日向	出雲・石見	明石	大阪	熊野路	佐渡	秋田	津軽	計
北海道	道								1
青森		県						県1948 八戸1948 五所川原1944	2
岩手	山田								1
宮城	県								1
秋田	県					県 鹿角	県 秋田		3
山形							県		1
福島							会津		1
茨城			県						1
栃木				県					1
群馬								県1944	1
埼玉									0
千葉									0
東京都	千代田 中央	中央 杉並	大田			江東		杉並1944 杉並1948	5

	日向	出雲・石見	明石	大阪	熊野路	佐渡	秋田	津軽	計
神奈川	鎌倉	鎌倉		横浜		県 鎌倉 横浜			4
新潟		柏崎		県		県 新潟 佐渡 上越 長岡 三条 柏崎 小千谷	県	県1944	5
富山									0
石川	県			県	県				3
福井		坂井		坂井	坂井	坂井		県1944	5
山梨									0
長野	佐久	諏訪			県	飯島		豊丘1944	5
岐阜	県 羽島	県 羽島	県	県				県1948	5
静岡		県							1
愛知	県	豊橋 幸田	名古屋 豊田	県 名古屋	豊橋	県 名古屋 一宮 豊橋	田原	名古屋1948 豊橋1948	8
三重				伊勢					1
滋賀						県			1
京都	府	府	府	府	府	府	府	府1944・1948	8
大阪	府	府	府	府 大阪 豊中	府 堺				5
兵庫			県 神戸 明石	神戸	県 神戸				3
奈良	県	県		県	県	県			5
和歌山		県			県 和歌山 新宮 紀ノ川				2
鳥取		境港 米子	倉吉						2
島根		出雲 松江 益田 安来	益田						2
岡山	岡山								1
広島		安芸太田							1
山口		県		県					2
徳島									0
香川									0
愛媛	八幡浜	八幡浜							2
高知		県							1
福岡	県 福岡	福岡	県				県		4

	日向	出雲・石見	明石	大阪	熊野路	佐渡	秋田	津軽	計
佐賀							県		1
長崎									0
熊本									0
大分									0
宮崎	県 延岡 日南		県	県	県			県1948	5
鹿児島									0
沖縄					県				1
合計	17	20	11	15	12	11	8	12	

- ・「道」「府」「県」は道（府県）立図書館を意味する。市町村名は各市町村立図書館を意味する。一つの自治体が複数の図書館（分室）を有する場合があるが、その違いは無視した。
- ・『津軽』の欄の数字は、1944年版と1948年版との違いを意味する。
- ・小郡市立図書館（福岡県）の蔵書検索では野田宇太郎文学記念館の蔵書も表示され、同館には本叢書の全冊が揃っているが、これは除外した。
- ・各図書館が該当作品を所蔵しているか否かのみを示す（部数は無視した）。

(2) 大学附属図書館（表6）

大学附属図書館の収書は研究目的で行われた可能性もあり、利用者としての学生・生徒との関わりは自治体図書館よりも低い可能性がある。出版時点ではなく、後年に購入された場合もあろう²⁵⁾。さらに組織の改編に際して廃棄されている可能性もある。こうした点で自治体図書館の所蔵状況よりも資料価値は低いと思われる。しかし師範学校や高等学校などで生徒用に購入した結果を、ある程度は反映しているのではなかろうか。所蔵状況はWebcatによって検索した。表6から以下の点を読み取れる。

- ・作品別に見ると、大学図書館でも所蔵数が最も多いのは自治体図書館と同じく、『日向』『出雲・石見』である。『明石』『熊野路』が少ないことも自治体図書館と同様である。しかし『秋田』は4位で『大阪』よりも多いことが異なっている。
- ・所蔵校の多くが東京・大阪に集中しているため空間的な偏りは必ずしも明瞭ではないが、自治体図書館と同様に、『日向』『出雲・石見』の所蔵大学は日本全体に広がっているのに対して、『明石』『大阪』は関西～関東で、『佐渡』『秋田』『津軽』は東日本で、それぞれ所蔵が多い。ただし『熊野路』は関西よりもむしろ東京・東北～北海道の大学で所蔵されている。
- ・本叢書の作品を1種でも所蔵している69大学のうち、全種類を揃えているのは北海道・鶴見・名古屋の3大学のみである（ただし注25）に記したように、少なくとも北海道大のものは後年の収集であろう）。神戸および戸板女子短・静岡・大阪商業がこれに次ぐ。逆に、半数近い33大学は1作品を所蔵しているのみである。1作品を所蔵する場合に、大阪の大学では『大阪』である場合が多く、九州の大学では『日向』である場合が多い。しかし逆は必ずしも成り立たず、それ以外の作品ではこうした地元・近隣の優位性は認めがたい。

表6 大学附属図書館における新風土記叢書の所蔵状況

		日向	出雲・石見	明石	大阪	熊野路	佐渡	秋田	津軽	
北海道	藤女子大学	○								1
	北海道大学	○	○	○	○	○	○	○	○	8
	北海道教育大学					○				1
宮城	東北大学				○	○		○	○	4
	東北学院大学					○				1
山形	山形大学		○							1
福島	福島大学	○						○	○	3
茨城	茨城大学	○	○				○	○	○	5
群馬	群馬大学							○	○	2

		日向	出雲・石見	明石	大阪	熊野路	佐渡	秋田	津軽	
千葉	千葉大学	○	○				○			3
東京都	慶應義塾大学	○								1
	駒澤大学						○			1
	首都大学東京				○					1
	昭和女子大学						○			1
	成蹊大学		○							1
	大東文化大学	○								1
	玉川大学						○			5
	戸板女子短期大学	○	○	○	○	○	○			6
	東京大学	○	○				○	○	○	5
	東京学芸大学							○	○	2
	二松學舎大学						○			1
	日本大学	○								1
	一橋大学				○					1
	法政大学	○		○						2
	明治大学					○	○			2
	明治学院大学		○							1
	明星大学					○				1
立教大学	○	○	○	○		○			5	
神奈川	鶴見大学	○	○	○	○	○	○	○	○	8
	横浜市立大学							○	○	2
新潟	上越教育大学						○			1
	新潟大学		○				○	○	○	4
	新潟産業大学						○			1
山梨	都留文科大学		○						1	
長野	信州大学	○							1	
静岡	静岡大学	○	○			○	○	○	6	
愛知	桜花学園大学		○							2
	名古屋大学	○	○	○	○	○	○	○	○	8
滋賀	滋賀大学	○			○				2	
京都	京都大学							○	○	2
	同志社女子大学		○							1
	佛教大学		○							1
	龍谷大学	○						○	○	3
大阪	追手門学院大学		○							2
	大阪教育大学						○			2
	大阪経済大学				○	○				2
	大阪樟蔭女子大学		○							2
	大阪商業大学	○	○	○			○	○	○	6
	大阪府立大学				○					1
	関西大学				○			○	○	3
	近畿大学				○					1
	相愛大学				○					1

		日向	出雲・石見	明石	大阪	熊野路	佐渡	秋田	津軽	
大阪	帝塚山学院大学		○	○		○				3
兵庫	神戸大学		○	○	○	○	○		○	7
	関西学院大学			○	○					2
	兵庫県立大学				○					1
奈良	天理大学			○	○		○			3
	奈良大学	○								1
	奈良女子大学					○				1
鳥根	鳥根大学		○						1	
岡山	岡山大学	○							1	
広島	広島修道大学			○						1
愛媛	愛媛大学	○					○			2
福岡	九州大学	○	○					○	○	4
	福岡教育大学		○				○			2
長崎	長崎大学						○	○	2	
大分	大分大学	○								1
宮崎	宮崎大学	○								1
鹿児島	鹿児島国際大学	○								1
		28	26	13	18	15	23	19	22	

「○」は部数を問わず、当該大学の附属図書館に所蔵されていることを示す。

IV むすびにかえて

郷土文学を志向した新風土記叢書がどのように流布したかということを調べるために、自治体図書館および大学附属図書館における所蔵状況を調べた。刊行当時全国的な意味を持ちえた『日向』は全国的に分布している。それ以外の作品の分布範囲はある程度限られたものであった。しかし「郷土文学」という言葉が予想させるほどに局限されたものではなく、緩やかな偏りにすぎない。その一方で叢書全体を所蔵する図書館がほとんどないことからすれば（焼失などの可能性も見落とすべきではないが）、本叢書はやはり全体として所蔵される類のものではなかったようである。これが出版社・作者の意図したことであったのか否か。またその判断は作品の内容にどのように反映したのか。今後はこうした点を考えていきたい。

付記 本稿作成にあたり、新風土記叢書の各巻その他の資料の閲覧と蔵書検索とのために、鳴門教育大学附属図書館および同館を介し（あるいは直接に）多くの図書館を利用させていただいた。関係者にお礼申し上げます。

末尾ながら本稿を、2015年3月に首都大学東京を定年退職される杉浦芳夫先生に献呈させていただきます。

注

- 1) 小山は安倍能成の甥であり、その縁で1919年から岩波書店に勤務し、1933年に独立して小山書店を創業した（小山, 1982, pp. 8・13）。
- 2) 逆に、東京を依頼した鍋木清方は引き受けたものの即座の執筆はできず、奈良を依頼した志賀直哉は断り、京都を依頼した谷崎潤一郎もすぐには引き受けなかった。

なお、以上の小山の回想の信憑性については疑問の余地がある。宇野の1936年2月2日付尾崎一雄宛書簡には、「三年前から約束のありました、書き下ろしの随筆「大阪」」（増田, 2000, p. 38）という記述があるからである。「約束」の相手は示されていないが、他者と「約束」したものを小山書店で刊行するとは考えがたい。本叢書の企画以前に、すでに小山は単発的な随筆を依頼していたのかもしれない。あるいは、小山の回想（小

- 山, 1982, p. 49) 通りに本企画に際して佐藤を介して初めて宇野を訪れたのであれば, 本企画の始まりは1933年まで遡るのかもしれない。
- 3) これほど具体的ではないが, 叢書第7冊の『津軽』について太宰は「評判がいいようだ」と述べている(1945年6月5日付堤重久宛書簡(太宰, 1991, p. 305))。なお, 宇野の1943年4月24日付関一雄宛書簡には「近い内に再版作(三十部書き足し)したのが再版で出ます」(増田, 2000, p. 60)とある。『大阪』は小山の表現が思わせるほどに早く再版に至ったのではないようである。
 - 4) 管見では第8冊の『秋田』に対する松田解子のもの(『日本読書新聞』329号(1945.05.21)掲載)のみである。
 - 5) 小山(1982, p. 196)自身, 『津軽』『秋田』の実際の刊行は1945年になったと記している。したがって, 『津軽』が1944年の状況下で準備されたといった指摘は妥当であっても, 1944年に刊行されたことを強調すること(たとえば横手(2004))はわずか2ヵ月程度の違いではあるが, 厳密には誤りである。
 - 6) 戦時中という特殊な状況下の資料であることを考えると, 本来は先ず, 広告の原稿作成と掲載とにどれほど時差があるか(したがって, 現状が反映されるか)を確認する必要がある。この作業は今後の課題としたい。
 - 7) 日本読書新聞には新刊書一覧を掲示する「新刊週報」(のちに「納本旬報」欄があった。しかし1943年後半になると, 263号(1943.08.21)のように一部を省略する場合や, 長期的に掲載されない期間(270号(1943.10.09)~285号(1944.02.05)や293号(1944.04.01)~302号(1944.07.01))が現れる(また266号(1943.09.11)は「適切を欠く表現」があったという理由で頒布が中止されている(267号(1943.09.18)掲載「謹告」))。このため1943年後半以降は図書の刊行状況を十分に把握することができない。
 - 8) 簡便のため, 誤解の虞のない限り以下では朝日新聞を朝日と略称する。同紙の記事・広告は同社の「聞蔵ビジュアルII」によった。
 - 9) 簡便のため, 誤解の虞のない限り以下では日本読書新聞を読書と略称する。同紙の記事・広告は不二出版の縮刷版によった。
 - 10) 1940年末に出文協が組織されると図書の定価は公定の基準によって機械的に定められたようである(小山, 1982, pp. 143, 151)。したがって, 価格の上昇は, 製本の素材・経費の上昇を端的に反映しているであろう。
 - 11) 台湾は例外と言えるであろう。「県域」はあるいは旧国と考えるべきかもしれないが, 本稿では本叢書の内容を論ずる準備はない。
 - 12) 全体構想の欠如という点については, 注3)で触れた宇野書簡(増田, 2000, pp. 59~61)に関連のある記述がある。すなわち宇野は, 関が計画している「ふるさと文庫」なる叢書について, 「もつと適当な土地と執筆者を考へつくまで案を練られなければ失敗した例を僕は知つてゐる」という。この失敗例が何を指すかは明らかでない。この書簡の後段で, 進行中の新風土記叢書と「ふるさと文庫」の構想とが対象地・執筆者で重複することを指摘していることからすれば, 新風土記叢書を失敗例と見なしているのではないと思われる。いずれにしてもこうした風土記的な叢書が全体構想のないまま進められた(あるいは進められようとした)ことが幾例かあることを示している。
 - 13) 京都は谷崎に代えて富田溪仙, その死後は西川一草亭, が起用された。すなわち京都に関しては執筆者ではなく, 対象空間が優先されたのである。
 - 14) 太宰は小田嶽夫宛1944年11月11日付書簡および11月24日付書簡で(太宰, 1991, pp. 297~298)で「越後風土記」を書くことを勧め, 小山書店への仲介を申し出ている。また田中英光宛1944年8月1日付書簡に付けられた編者注によれば『土佐』は太宰の勧めで田中が執筆することになったという(太宰, 1991, p. 293)。
 - 15) 田畑・中村は第1巻, 太宰は第5巻, 田中は第6巻, 伊藤は第10巻が初出である。
 - 16) 中村や太宰の師である井伏鱒二は執筆予定者として名が挙げられていない。しかし彼の「山峡風物誌」の前書き部分には, 同作が「戦争のはじまる前に小山書店と約束しておいた「甲斐風土記」のための素材だとある(井伏, 1998, p. 9)。もとより同作は全体が井伏の創作であり, したがって前書き部分も井伏に関する事実と読むことはできない(東郷, 1996)。しかし井伏が実際に甲斐あるいは備後の執筆を打診されさらに応諾もしていた可能性はあろう。小山は創業の頃, 井伏と同じ荻窪の天沼に居住していた(小山, 1982, p. 13)ので, 直接の業務の外でも交流があったのではなかろうか。
 - 17) 木山(1969)は何故か小説に分類されている。小説である以上, その記述を無条件に事実と見ることはできない。しかし『津軽』執筆に関して井伏が太宰にアドヴァイスしたというこの逸話は, 初出時(木山, 1964,

- p. 60) には1944年の初春のこととされていた。作品内で見える限り、この逸話を全集版のように1943年の冬に移動する必要性は感じられない。とすれば、この改変は事実に基づく修正であり、したがってこの逸話は事実を反映している、と考えていいのではなかろうか。
- 18) 『大阪』『熊野路』の巻末広告は安部能成の『ギリシャとスカンディナヴィア』単独のものであった。『佐渡』では新風土記叢書の既刊分一覧と『日本小説代表作全集』・『八雲』との広告が付いているが本叢書について説明文はない。また『津軽』『秋田』（および『明石』）では巻末広告自体がない。
- 19) この点は執筆者として地理学者を考慮しなかったという点と整合している。しかし、本叢書の作品は基本的に地誌と見なされてもいた。すなわち日本読書新聞は刊行情報を掲載する際、多くは種類別に掲載する（それが出版社の自己申告によるものか否かは筆者には明らかではない）。その分類枠は必ずしも同じではないが、本叢書の作品は以下の欄に掲載されている：
- 『佐渡』：新刊週報「地誌・紀行」
 - 『出雲・石見』：新刊予報「地誌・紀行」
 - 『明石』：近刊予報「歴史・地誌」
 - 『日向』：近刊予報「文学総論・評論」
 - 『津軽』：近刊予報「歴史・地誌」。納本旬報「文学」
 - 『秋田』：近刊予報・納本旬報ともに「歴史・地誌」
- 20) 古風土記・近世風土記の復刻や研究書ではない、『風土記』という題名をもつ書籍の刊行状況を表3に示した（国会図書館の蔵書検索システムにより、1868年～1945年に刊行された図書を題名「風土記」をキーワードとして検索した）。昭和期（特に1930年代初めから）に急増していることが分かる。
- 21) 佐藤は1933年に「小説熊野風土記」という作品を書いており（前田，1998，p. 410），また小山から相談された時、「すでに熊野路についての草案をもっているからすぐに書ける」（小山，1982，p. 49）状態であった。宇野は『大阪』の跋に「昭和八年の秋頃から構想にかかり，昭和九年の春頃と夏頃と二度，構想をやり直したりする内に昭和十年になった。昭和十年の秋に，改めた構想で書き直して，曲がりなりに，やっと出来上がった」（宇野，1936，p. 165）と記す（注2）に引用した宇野書簡と内容的には矛盾しないが，そこに記したように本叢書との関係は明らかではない）。田畑は1939年に「文学的風土記」（田畑，1980b，pp. 436～439）という随筆を発表した。中村（1944，p. 257）・伊藤（1944，p. 261）は本叢書の執筆以前からこうした作品を書くことを考えていたと述べている。
- 22) ただし1944年版の単純な増刷ではなく，太宰が改訂して前田書店から出版した内容のものを発行したものであるという（津島，1970，p. 251）。
- 23) 以下，簡便のため，誤解のない限り「都道府県」を包括して「県」と呼ぶ。
- 24) 『日向』の執筆者である中村地平は1947年～1957年に宮崎県立図書館長をつとめた（黒木・久保，1971，pp. 398・400）。宮崎県立図書館が所蔵する本叢書はこの時期に収集された可能性もあろう。
- 25) 管見の事例では，北海道大学の『大阪』や九州大学の『日向』は古書店を経由したものである。一方，愛媛大学の『佐渡』『日向』，大阪大学の『津軽』，茨城大学の『佐渡』，新潟大学の『秋田』はいずれも前身校から引き継いだものであった。

文 献

- 青野季吉『佐渡』小山書店，1942年
 青野季吉『文学五十年』日本図書センター，1990年
 伊藤永之介『秋田』小山書店，1944年
 伊藤永之介「精神的な放蕩記」日夏之介『青春記』修道社，1956年，47～48
 井伏鱒二『山峡風物誌』井伏鱒二『井伏鱒二全集 第12巻』筑摩書房，1998年，5～28
 尾崎一雄『尾崎一雄全集 第14巻』筑摩書房，1985年
 小山久二郎『ひとつの時代－小山書店私史－』六興出版，1982年
 笠原政治「森丑之助と佐藤春夫」楊南郡著笠原政治ほか訳『幻の人類学者 森丑之助 台湾原住民の研究に捧げた生涯』風響社，2005年，249～274
 木山捷平「太宰治」『新潮』61-7，1964年，44～66

- 木山捷平「太宰治」 木山捷平『木山捷平全集 第2巻』新潮社, 1969年, 674~697
- 黒木清次・久保輝巳「中村地平年譜」 中谷孝雄ほか『中村地平全集 第3巻』皆美社, 1971年, 393~401
- 紅野敏郎「太宰治の本－「新風土記叢書」をめぐって－」『国文学 解釈と教材の研究』24-9, 1979年, 116~122
- 紅野敏郎「田畑修一郎年譜」 田畑修一郎『田畑修一郎全集 第3巻』冬夏書房, 1980年, 511~524
- 紅野敏郎「『新風土記叢書』とその周辺」『文学』51-10, 1983年, 89~102
- 紅野敏郎「年譜」 尾崎一雄『尾崎一雄全集 第15巻』筑摩書房, 1986年, 445~478
- 週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社, 1981年
- 相馬正一『評伝太宰治 下』津軽書房, 1995年
- 高澤健三「太宰治『津軽』と“風土”」『文学と教育』187, 1999年, 37~46
- 太宰治『太宰治全集第11巻』筑摩書房, 1991年
- 田畑修一郎『田畑修一郎全集 第3巻』冬夏書房, 1980年 a
- 田畑修一郎「文学的風土記」 田畑修一郎『田畑修一郎全集 第2巻』冬夏書房, 1980年 b, 436~439
- 田宮虎彦「故郷を求める心」 田中英光『田中英光全集 11』芳賀書店, 1965年, 346~348
- 津島美知子「創芸社版『太宰治全集』後記」 日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書 太宰治』有精堂出版, 1970年, 238~261
- 東郷克美「聞書きという姿勢－「山峡風物誌」を読む」 東郷克美・寺横武夫編『昭和作家のクロノトポス 井伏鱒二』双文社出版, 1996年, 72~88
- 中村地平『日向』小山書店, 1944年
- 中村地平『日向』角川書店, 1957年
- 中山義秀全集編集部「年譜」 中山義秀『中山義秀全集 第9巻』新潮社, 1972年, 479~503
- 成田龍一「『故郷』という物語 都市空間の歴史学」 吉川弘文館, 1998年
- 林清司「田中英光年譜」 田中英光『田中英光全集11/11』芳賀書店, 1965年, 431~464
- ふくやま文学館編『井伏鱒二と交友した文学者たち－師・友人・弟子・後輩－』ふくやま文学館
- 藤原耕作「太宰治『津軽』」『福岡女子短大紀要』49, 1995年, 119~131
- 前田久徳「解題」 佐藤春夫『定本佐藤春夫全集 第9巻』臨川書店, 1998年, 408~440
- 松下裕編『中野重治全集別巻』筑摩書房, 1998年
- 増田周子『宇野浩二書簡二集』和泉書院, 2000年
- 松本八郎「書物のたたずまい(2)小山書店《新風土記叢書》」『日本古書通信』71-2, 2006年, 1
- 矢富巖夫「「出雲・石見」の郷愁と抒情性」 表現研究会編『篠原稔教授退官記念 表現論集』表現研究会, 1970年, 180~191
- 山内祥史「解題」 太宰治『太宰治全集 第6巻』筑摩書房, 1990年, 407~450
- 山内祥史「年譜」 山内祥史『太宰治全集 別巻』筑摩書房, 1992年, 457~579
- 山口浩行「旅人が見る故郷－風土記としての「津軽」」『日本近代文学』67, 2002年, 128~141
- 山口浩行「佐渡に渡る旅行者たち－青野季吉・保田與重郎と太宰治の「佐渡」」 斎藤理生・松本和也編『新世紀 太宰治』双文社, 2009年, 148~162
- 横手一彦「太宰治『津軽』小論－未成の素因と未成の者への言葉－」『太宰治研究』12, 2004年, 45~68
- 吉岡真緒「『風土記』の系譜－『津軽』の感覚」 斎藤理生・松本和也編『新世紀 太宰治』双文社, 2009年, 182~197

Was Sin–Hudoki Sosyo (New Chorography Series) distributed evenly in Japan? : a survey of possession of public libraries

TATUOKA Yuuzi

(Keywords : Sin–Hudoki Sosyo (New Chorography Series), Oyama–syoten, Heimatdichtung, public libraries)

In 1936–1948, Koyama–shoten published 8 books under the title of Sin–Hudoki Sosyo (New Chorography Series). Koyama had confidence that this series aiming at Heimatdichtung would gain popularity. Finally this series suffered a setback by the War. It is said that the series succeeded to a certain extent. This author survey the possession of public libraries to make clear whether the books of this series were read everywhere in Japan. The survey reveals that the distribution of the books has spatial partiality, but that the partiality is not so keen.